

図書館員出身作家のメンタリティ その2

篠田節子のケースについて

—図書館はどうみられてきたか・11—

佐藤毅彦

Mentality of a Writer who has experience in working as a library staff (2)

Description Concerning Shinoda Setsuko's novels

—Image of the Library (11)—

SATO Takehiko

Abstract : The characters in the novels of Setsuko Shinoda often use the library for various kinds of research. Those stories are based on her experiences as a librarian. I analyzed her works to see how she portrayed libraries through these characters and how those images changed over time in her novels. In particular, I found her characters up until the mid-'90s used reference books or asked librarians. In later novels, both the library users and librarians changed reference tools from those sources to digital sources including the internet.

要旨：篠田作品には、市役所や図書館の勤務経験を背景に、作品中の人物が、図書館を利用して、なにかを調べるシーンが多くみられる。それらを時系列的にみていくことで、作品内容と図書館の利用のされ方、利用者側の図書館に対する意識の変化などについて考察した。

1990年代半ばまでの作品では、小説の登場人物が図書館で調べものをしたり、図書館員が相談に対応するシーンがみられたが、その後に発表された作品では、情報流通の電子化に対応した手段がとられていることが、確認できた。

1. はじめに

2009年7月、日本テレビ系列のドラマ『LOVE GAME』で、精神的なストレスを感じている女性図書館員が、書庫内で作業中に書架の本を払い落とすシーンが放映された¹⁾。このドラマは、タイトルにもあらわれているように、登場人物の恋愛や人間関係を中心にストーリーが組み立てられたものなので、キャストの職業にさほど大きな意味があるとはいえない。しかし、「図書館司書」と設定されている人物が、自らの職業に密接に関連するものを、粗略に扱っていること

は、図書館や図書館職員のイメージに好感をもたらすものではあるまい。そうしたシーンを放映しても、とくに大きな問題とはならないだろう、と、ドラマの制作がわが考えている、ということでもある。図書館の現場ではたらく職員や、図書館学・司書課程を受講する学生も女性が多くを占めており²⁾、このドラマでとりあげられた図書館・図書館員のイメージが、実際にもありそう、と視聴者に受け止められかねないのは、残念なことである。

一方、職業として、図書館の現場を経験した女性の中には、図書館での体験を背景とした著作を発表しているケースがみられ、「図書館はどうみられてきた

か」というこの論考でも、これまで何度かとりあげてきた³⁾。

「長崎大学教育学部講師、助教授」から、「1991(平成3)年、福岡市に初の女性部長として招かれ」「教育長などを歴任。現在、福岡市総合図書館館長」である、植木とみ子⁴⁾、「杉並区立の地域図書館、杉並区立中央図書館などを経て、現在、杉並区立中央図書館嘱託。全国各地での読書推進のための講演会講師、図書館員養成講座の講師をつとめる」田中共子⁵⁾、「昭和41(1966)年より、山形県鶴岡市の専門・専任・正規の学校司書として鶴岡市内の小学校5校、中学校2校に勤務」「現在、鶴岡市教育委員会、図書館支援業務員として、鶴岡市内の学校図書館支援に当たっている」五十嵐絹子⁶⁾、「東北大学附属図書館を経て、現在、東北福祉大学准教授(図書館学)」である大島真理⁷⁾、などによる著作が、2009年に、刊行されている⁸⁾。また、「カリフォルニア州で歴史学と図書館学を修了し、司書として働いたあと1979年より作品を発表」している、ジェイン・アン・クレンツ⁹⁾、「ノースカロライナ・セントラル大学で図書館学および情報科学で修士号を取得。その後8年間中等学校の教師をしていた」J・B・スタンリー¹⁰⁾、などのように、図書館に関する専門的知識を有する著者が、図書館に勤める人物をメインキャラクターとして登場させている小説が、日本語に翻訳され、本年(2009年)、刊行されている。

これまで、「図書館はどうみられてきたか」と題したこの一連の論考で、図書館勤務経験のある作家の描く図書館像について取り上げ、「女性作家が描く女性図書館員」という観点から考察の対象とした¹¹⁾。その中で一部の作品をとりあげたことのある、篠田節子は、自治体職員として、図書館員を経験しているが、そのエッセイでの図書館利用者に向けた提言は、図書館現場での経験を背景にした、作家としての思いが表れているといえよう¹²⁾。

2. 篠田節子の小説作品と 図書館に関係するストーリー

篠田節子は、1955年生まれ。八王子市役所に勤務した経験があり、図書館に配属されていた期間があった。1990年、『絹の変容』により第3回小説すばる新人賞を、女性としてははじめて受賞し、また、『ゴサイタン-神の座-』により、1997年第10回山本周五郎賞、『女たちのジハード』により、1997年上半期第117回直木賞、『仮装儀礼 上』『仮装儀礼 下』に

より、2009年第22回柴田練三郎賞を受賞。現在まで、小説30点あまり、エッセイ・紀行集ほか、数点を刊行してきている¹³⁾。

篠田作品には、市役所や図書館の勤務経験があることを背景として、ストーリーに図書館や図書館員の登場する作品が多く、作中の人物が、図書館を利用して、何かを調べるシーンがみられる。今回は、篠田節子の作品について、図書館と関連のあるストーリーをとりだし、図書館を利用して、何かを調べるシーンを時系列的にみていくことで、作品内容と図書館の利用のされ方、利用者がわの図書館に対する意識の変化などについて考察した。なお、文庫化されているものは文庫版を参照した。

篠田節子がこれまでに発表した、30点あまりの小説単行書のうち、半数以上に、なんらかのかたちで図書館とのかかわりのあるストーリーが含まれている。以前、東野圭吾の作品をとりあげ、登場人物が図書館を利用する場面が多いことを指摘したが、東野の最近作でも『容疑者Xの献身』2005では、大学図書館で、刑事が、友人でその大学の所属メンバーである教員の利用履歴を、カウンターで尋ねるシーンがあり、『流星の絆』2008では、登場人物のひとりが図書館でコピーをとっていたことをほめかす記述が、ストーリーの中に含まれている¹⁴⁾。篠田節子の作品にも、その種のシーンが数多く含まれており、図書館に勤務した経験が背景に存在していることが考えられる。それらを時系列的にみると、情報流通の電子化に対応した内容となっている状況が、確認できる。

次に、単行本の刊行年順に、図書館に関係のあるストーリーについて、作品ごとに示す。

01. 『贗作師』1991¹⁵⁾

栗本成美は、国立美大に現役で入学し(p.8)、卒業後は、四十を目前に、中堅の修復家となっている。日本洋画界の大御所、高岡荘三郎の死後、そのコレクションの修復を依頼され(pp.18-19)、作業の中で、この人物と関係者について調べようとする。母校の美大の資料室で「高村荘三郎」についての記事を探すうち「いくつかの大衆雑誌に荘三郎の結婚についての記事が掲載されたことがわかった。その足で雑誌専門の図書館に向かった。しばらく待たされた後、表紙の色あせた数冊の週刊誌を渡され」閲覧する(pp.96-99)。この「雑誌専門の図書館」の様子について、「成美は、こぶしでコツコツと机を叩いた。そのとたん、カウンターの中の司書と視線が合った。『静かにしろ』

というように、中年の司書は目で合図した。成美は首をすくめて下をむいた。「とくに目新しい情報はなかったが、成美は記事をまとめてコピーし、自分のバインダーに挟みこんだ」(p.100)と描写されている。

また、関係者の自殺について、成美は「駅前にある図書館に行き、当時の新聞の縮刷版に当たったが、それらしい鉄道事故の記事はなかった。カウンターに行き、尋ねると、司書が、武蔵野地区で起きたことなら、全国版を掲載した縮刷版ではなく、地方版を記録したマイクロフィルムがあるので、そちらを利用するようにと言う。渡されたマイクロフィルムを投射機にセットしてもらい、成美はその年の分の最初から目を通し「ハードコピーをとって、図書館を出る」(pp.194-195)という行動をとっている。

このほかに、大学病院の医局の図書室を、面談の場所として使う場面がある (p.197)。

02. 『アクアリウム』1993⁴⁾

長谷川正人は、教育委員会職員で、学校教育課に勤めている (p.133)。あるドキュメンタリー番組で放映された内容を確認しようと、区立図書館へ行く。「教育委員会とつながりがあるので、職員とは顔見知り」で、「すでに消灯した館内に入り、そのビデオをみつけ」「知り合いの図書館員は、そっと事務所内に入れてくれ」「事務用デッキ」で、そのビデオをみる (pp.228-229)。

03. 『神鳥 (イビス)』1993⁵⁾

谷口葉子は、「三十を二つばかり過ぎた」イラストレーターだが、出版社を通じて「流行作家」美鈴慶一郎の小説のカバー絵を依頼される。小説の内容が河野珠枝という画家に関するものであり、その作品「朱鷺飛来図」を原画に、雰囲気を生かしてほしいとのことであった (pp.6-9)。画家と作品について調べていくうち、奥多摩地域で起きたある事件に、この絵が関係していることが判明する (p.119)。葉子は、観光協会に電話をかけるが、くわしいことはわからず、作家の美鈴に相談すると、「まず、地域図書館に行くんだ。日原周辺になれば、その上の行政区のね。奥多摩町立図書館なんていうのがあって資料が充実していればいいけど、なかったらその近辺の大きな町を探す。その図書館の郷土資料を探すんだ。活字本がなければ古文書にあたる。もちろん現物に触らせてはくれないけど、コピーサービスをしてるから、それを見ればいい」(p.123)と言われる。二日後、葉子は、「青梅の

図書館」へ行き、「郷土資料コーナー」へ行ったが、関連資料は少ない。「カウンターで尋ねると、西多摩郡あたりの地方情報を中心に出版している地方出版社」があることがわかり、そちらに向かう (p.125)。また、作家の美鈴は、「コンピュータデータベースを使って、明治時代の大雪の記録を調べ」(p.130)それが、この絵に関係していることをつきとめる。

04. 『聖域』1994⁶⁾

実藤は、「出版部数三千部」の文芸誌『山稜』に勤務する編集者で「文芸編集の仕事を希望して、ここ山稜出版に入社」し、現在「掲載予定の原稿のどれもが、実藤にとって退屈極まりないもの」で、「三十を間近に」「高い意識と意識に及ばぬ実力のはざままで、いくぶんいらいだち気負い立って」いた (pp.7-9)が、「偶然みつけた原稿の束」にあった、水名川泉の『聖域』という作品に興味をもつ (pp.22-23)。この作者が、「新人賞としての権威は高い」『北斗文学賞』を『あずさ弓』で、昭和四十九年に「文壇の大御所、三木清敦」と同時受賞していたことが、三木のプロフィールの記述から判明する (pp.91-92)。「実藤は手元にある分厚い出版年鑑」をみるが、水名川の名前はなし。水名川の小説を掲載していた「雑誌『北斗』を発行している新文学社に電話をかけ」て、二十年近く前の雑誌を見たいと申し出るが、結局、簡単な経歴がファックスで送られてきただけだった。実藤は、「作品は、雑誌に掲載されただけで単行本にはなっていない。掲載誌を新文学社で保管していないとなれば、図書館に行き、十八年前の『北斗』を探すしかないだろう。時計を見るともう八時を過ぎていた。図書館は閉館している」(pp.92-93)と考える。

実藤は、出版社の先輩社員から、水名川泉の作品が『異端文芸』というような名前の雑誌に載ったことを聞きだして、「守衛から鍵を受け取り、社内の図書室に向かう」「参考図書のところに行き、古い雑誌目録を取り上げた。文芸誌のページをあけ」「五十音順に並んでいるのを目で追っていき、作品が掲載された雑誌の「正しい誌名は『異端文学』」で「出版社名は『蒼夜館』」であることを確認するが、「出版年鑑で調べてみると」倒産していた。この雑誌をみるには「古本屋をあさる手もあるが、確率は低い。どこか保存している図書館でコピーを取るのが確実だ」(pp.116-117)と考える。しかし「大宅文庫の目録」にはなく、「都立図書館の目録を見るがやはりない」「当たり前だ。税金で得体の知れない雑誌を買うわけにはいか

ないからだ。が、一カ所、税金で女性週刊誌からセックス記事を満載した青年誌まで集めている所がある。選択の余地なしに、発行物すべてを保管している現代の阿房宮、国立国会図書館だ。愛想が悪いが確実に資料はある」(p.117)と国立国会図書館を思い浮かべる。

翌日、実藤は、「作家の調査代行だと偽り、国会図書館に向かい、水名川泉の名前を検索すると、四件出てきた。「請求票に必要事項を記載して列に並ぶ。待つこと三十分余りで、問題の雑誌四冊が目の前に積み上げられ」「コピー請求票にページ数を記載して、再び列に並び、「分厚いコピーの束を受け取るまで、一時間ほどかか」(pp.118-119)ったが、近所の喫茶店でそれを読みはじめる。その結果、水名川泉自身や、その作品の内容・舞台に関連がありそうな事実について調べようと「実藤は、大宅文庫に電話をかけた。今から七年から九年前の宗教がらみの殺人、あるいは暴行事件の記事を探してほしい、と依頼」し、場所は作品の舞台の青森県に限定した。「資料がファックスで届いたのは、翌日だった。全部で四件あった」が、決定的な情報は得られず、「電話一本で問い合わせようというのが、虫がいいのかもしれない」(pp.121-122)と感じた。

「実藤は、社内にある図書室に行った。オンライン端末の前に座り、新聞記事のデータベースにアクセスする。範囲を宗教と事件に絞り込み、さらに地域指定は青森県から東北全体に広げ」(p.122)て、記事を追っていき、作品に関連のありそうな、身元不明の遺体発見という記事を見つける。この遺体は、作家のことではないかと推理するが、結局これは水名川泉ではなかった。

実藤は、友人で水名川泉と同じ大学出身の人物を思い出し、電話で話すうち、水名川作品の内容が、下北地方に関連があることに思いいたり、恐山まで出向くが、すでに冬季の閉山期間になっていた。山門の周囲を歩き、「むつ市内に戻ったのは、四時過ぎだった。ドライバーに郷土博物館か、図書館はないか、と尋ねると、博物館はないが、図書館ならあると言って、高台にある公園に連れて行かれた」「高台の一隅に、古びた木造建築が建っていた。スリッパに履き替えて中に入ると、司書らしい男が、一人コピーをしている。人気はなく、狭い室内は、静まり返っていた。実藤は司書に挨拶し、名刺を差し出した。五十がらみの男は館長だった」「恐山や下北半島の民間信仰についての資料を見たい、と申し出た。館長は、郷土資料コーナ

ーに実藤を案内した」(p.154)。「とりあえず目指す所をコピーし終え、実藤は一般書の棚を見た。町の図書館らしく、小説と児童書などを中心に揃えてある。予算がないのか、新刊本は、ごく少なく、どれもが四隅がすりきれた名作や十年前のベストセラーの類だ」(p.156)。前半にでてきた「文壇の大御所、三木清敦」の本があり、その本には、「『むつ市立図書館様 三木清敦』とサインがしてあった。館長に尋ねると「『調べ物をされたい、とおっしゃって』『コピーをとってさしあげました』」(p.157)と、むつ市の図書館に、有名作家の三木清敦が来館していたことがわかる。「実藤は、その章をコピーした。図書館を出たのは、閉館間際だった」「急行八甲田の座席に座ると、実藤は図書館でコピーしてきた文献を取り出した。すぐに気づいたのは、先程は気づかなかった文章の一カ所に線が引いてある事だった。元々、薄く鉛筆で引いてあったのだろうが、コピーする事で鮮明になったらしい」(p.158)とあり、何者かが自分と同じ資料を参照していたことがわかる。

ほかに、雑誌を紹介するところで「『ヴィップ』は書店売りしていない。通信販売のみで扱い、購読者を年収一千五百万円以上、大手企業の部長クラス以上に絞った、ビジネスと人事に関する情報誌だ。つい最近も、下級公務員と公立図書館からの購入申込みを断ったばかりで、徹底した差別化をはかっている」(pp.199-200)との表現がある。

05. 「コンセプト」『愛逢い月』1994⁷⁾所収

編集者である正木の妻は、悪性腫瘍で一年もたないと宣告された(p.79)が、ホスピスで「盲人のための点訳を始めた。訳本が出来上がっていくのを楽しみに、タイプを打っている」(p.100)という。

06. 『夏の災厄』1995⁸⁾

「東京郊外のニュータウン」(文庫本裏カバー)埼玉県・昭川市で、日本脳炎に似た症状の病人が発生する。その事件に関係して、真相を探り、事態の解決にむけて行動する人物が、情報を収集しようとする。

メインキャラクターのひとり、医師の「鶴川日出臣は、小柄なせいもあって四十五という歳にはみえない」(p.43)人物で、薬の副作用について新聞に告発して大学を追い出され、信州の無医村やパレスチナで活躍した。帰国してあるNGOに所属し、インドシナの難民キャンプで医療活動をするはずだったが、過去の経歴を理由に旅券の発給を拒否された(p.262-

265) という経歴であることが紹介される。彼は、今回の病人発生が、生物兵器によるものである可能性を考え、市民団体に情報を流したところ、それが新聞にとりあげられ『『アメリカのある民間医療ネットワークから重大な情報を得ることができた』』(pp.273-274) という。日本脳炎に症状が似ていることから、鶴川は、そのウイルスを研究している、アメリカ国防総省について調べ、ある訴訟で『『国防総省は、今まで秘匿しておいた計画の一部を公開せざるをえなくな』』り、兵器として、効率的かつ制御可能なウイルスを作るようになったことを知る (pp.250-251)。

さらに、「鶴川は別のコピーを取り出した。今度は、日本語だ。文書の右上に、『週刊 エコノミージャーナル』とある」この雑誌は、昔は硬派の報道誌だったが、バブル時代に部数を伸ばし始めてから中身がおかしくなったといわれているが、『『これは五年前に発行されたものなんだけど、めずらしく良心的な記事だ。きょうの午後、県立図書館からコピーしてきた』』「問題の記事は、『アメリカ細菌戦争計画に加担する厚生省、予防衛生研究所』と題されたものだった」(pp.253-254) という。「鶴川は公衆衛生図書館に問い合わせ」「検索してもらった結果」「彼の考えたようなこととは無関係であったことを確認した」「鶴川は、手の中の分厚い英文の綴りを見下ろした。アメリカの医療ネットワークにテレックスを送るより先に、東京にある専門図書館に問い合わせるべきだったのだ。いくら切羽詰っていたとはいえ、雑誌記事を鶴呑みにして裏も取らずに動いたことを後悔したが遅い」(pp.278-280) と感じる。

その後も、「鶴川は最近では頻繁に東京の公衆衛生図書館に足を運んでいた。保健所や行政機関の設置した委員会のマニュアル通りの疫学調査からは、何も出てこない」と彼には思え、「アメリカの大学から出された膨大な量の報告書や日本の学会誌」「WHO の資料」「年次報告書」「ウィークリーレポート」などを調べるが、有力な情報は得られない。「コンピュータ端末を操作し、ここ十年の」「情報を検索した。」「対象文献の範囲は、学術論文や公式レポートだけでなく、海外の新聞雑誌報道まで含めた。しかし件数が多すぎエラーになった。」「疾患を中枢神経系のものに絞り込む。五分近くかかって、四百を超す文献が表示される。さらに同じ時期、同じ場所で発生したものを一括りにして」リストアップし、その文献をみていくと、「さほど重要視していなかった薄っぺらな情報誌に、奇妙なひっかかりを感じ」て、インドネシアのある地

域での病気の流行が、今回のこの昭川市での流行に酷似していることに気づく (pp.348-350)。

「鶴川はコンピュータ端末に向かい、地域をインドネシアに絞り込み、この時期の伝染病発生の情報を検索する」が、情報は限られ、関係なさそうにみえる。「公衆衛生図書館を出た鶴川は、その足で渋谷に向かう。「アセアン医師連絡会議という若手医師で構成される NGO の本部」で、三十人足らずの「日本各地に散らばった医師たちは、互いにパソコンやファックスを使い情報を交換」している。「鶴川が現地情報を検索させてくれ、と言うと、受付の事務員は快く本部事務室へ案内してくれた。」「鶴川は端末の前に座ると、先程公衆衛生図書館で行なったのとおなじように」検索する。「目指す情報に行きついたのは、一時間も画面にはりついた後」で、「鶴川は、院長に丁寧な挨拶し、勝手にパソコンを使ったことを詫言」と、『『使用料は高いぞ』』と」(pp.352-354) 言われる。

「鶴川はコピーした大量の資料を抱え、その足で保健センターに向かい、「問題の文書をパソコンネット」で大学の研究室や大病院に流し」たが、「ただしどこかで拾い上げられ有効に利用してもらえる可能性は低い」(pp.366-368) と感じていた。

もう一人のメインキャラクタである、小西誠は、昭川保健センターの「二十代の独身男性で、正職員」であり、パートタイマーの女性職員を管理しているが、使いこなせば一人前、なめられるのははずいだが、嫌われたらやっていけない、という状況にある (p.18)。

小西は、大学付設の病院内の老人科の医局図書室にある『大東亜共栄圏構想における南方の伝染病と公衆衛生』という本を持ち出すことを依頼される (p.433)。「図書室は、三階と四階の階段の中途の部屋」で、「広いが天井の低い奇妙な部屋だ。窓をつぶすような形で、背丈の高い本棚があ」った。目指す本はすぐみつき、「書名の金箔がすっかり剥げ落ち、変色した表紙の上に文字が窪んでいるだけ」の本で、「現代史の研究者ならともかく、医学を専攻するものなら決して手に取らない本。そして整理するときにも、タブーか何かのように、だれも捨てようとは言い出さない類の本」だった。「大型の英和辞典程の大きさの本を書架から引き抜く。埃にまみれて、ざらついた手触りだ。何度か修理された跡のあるぼろぼろの箱から、そっと取り出す」と、「茶色に変色した紙に旧漢字、旧仮名遣いが並ぶ目次の後ろのページから、中身はまとめて切り取られていた。その空間に発泡スチロールの枠に入った何かが収まっている」て、「それを

小脇に抱え、電気を消して廊下に出た。そのとたんピーと鋭い音の中でした。青ざめて再び中に入る。音は鳴り止んだ。再び出ようとする、再び何か鳴り出す。理由はすぐ分かった。本にセンサーがついているのだ。高い医学書を持ち出したきり返さない不埒な者がいるのだろう。しかるべき貸し出し手続きをとらないと、警告音になる仕組みになっている。「持ち出さなければならぬのは、この本ではない。つまり中に隠されていた発泡スチロールに収まっているものだ。急いで箱から本を抜き、中身を取り出し白衣のポケットに入れ、本は書架に戻す。そのまま飛び出したが、はたして今度は何も鳴らなかった」(pp.437-439)という。

小西が「大学病院の医局から盗み出したものは、一巻のマイクロフィルム」で、小西が持ちこんだそれを鶴川は「プロジェクターにかけてハードコピーを取った」が、内容はワクチンの製法に関するデータだけで、ウイルスの兵器化には触れていない(p.441)。

「走って五分のところ市立図書館がある。裏口から入った小西は、そこの電算室に飛び込んだ。小西と同期入庁の司書が一人、コンソールの前で、データの入力をしていた。『ばたばた走り回らないでよ。ほこりが立つから』画面から目を離さず、女性司書は叫んだ『あの、ちょっと』司書は化粧気のない無愛想な顔をあげた。『なんだ。センターの小西君かあ』『悪いけど、新聞検索、一件たのまれてくれないかな』司書は、片手でキーボードを叩いて、検索画面に切り替えた。『何新聞?』『とりあえず、朝日新聞』と小西は、発行年と、キーワード・ジャンルを掛け合わせて検索してくれるよう依頼する。『これオンラインなんだから、アクセスするの高いのよ』司書は仏頂面で、画面をスクロールさせる。『同じ役所なんだから、いいじゃん』『予算は別々でしょうが』と言われる。朝日新聞にめぼしい記事はなかったが、経済紙の方にあり『これだ』小西は画面を叩いた。『振動与えないで』と司書の声が飛ぶ。『ハードコピー、取る?』『もちろん』記事のコピーが印刷機から滑り出してきた」(p.443-444)という。

一方、「小西が、図書館でみつけた新聞記事から新事実につき当たったように、鶴川の方も、マイクロフィルムの中から新たな資料を見つけ出していた。何も映っていないように見えたフィルム後半のラスト近くに極めて簡潔に書かれたブンギ島民全滅の記録があった」(p.456)と、インドネシアの一地域の出来事と結びつく。

小西は学生時代のサークルの名簿から、生物学専攻で、巻貝を専門にして大学に残っている人物に電話をかけて調査を依頼する。「パソコンのデータベースを使って調べておく、と約束した。電話の音に叩き起こされたのは、夜中の二時半過ぎのこと」「『今、おもしろいことがわかったから、すぐにメールを送るよ。ID教えてくれ』『研究者の生活時間というのは、サラリーマンとは若干ずれているらしい。『ちょっと待って、パソコン持ってないんだ。ファミコンならあるけど』』と言って、その場で、電話で説明してもらう(p.513)。

事件の舞台となる埼玉県・昭川市は、「人口八万六千人」(p.72)、「私鉄特急」で「四十三分かけて東京に」出られるので、「二、三十年前まで農林業の町だった昭川は、今、都心へのベッドタウンに様変わりしていた」(p.81)という土地である。

その中で「元は山村であった窪山町」に「山を切り開いて作った若葉台住宅」(p.73)は、「食料品店は中型のスーパーマーケットが一軒あるだけで、市街地から小型のトラックでやってきていたが、病人が出たことで「やってくるのは、地区の移動図書館車ばかりである」(p.136)という状況になったことが示される場面がある。「混合自然林」「浮島のように若葉台住宅はあり」「森の中の清閑な住宅地」である一方、「正面に落ち込む谷を隔てて、小さな集落がある。窪山町である」(p.137)「窪山のほうは、道路整備は遅れ、トイレは浄化槽で、バスは日に数本しかなく、移動図書館車も健康診断車も来ない」(p.145)という状況であることが説明されている。

07. 「ファンタジア」『死神』1996⁹所収

富樫由梨江は、「大学を卒業し、五年間の図書館勤務を経て、福祉事務所の保護係に来て丸一年。学生時代に抱いていた『社会福祉』のイメージと、現実の修羅場とのギャップに、そろそろ慣れてきた」(p.269)という状況にあった。かつて愛読した、作家の「秋元碧先生。中学から高校にかけての五年間、由梨江の本棚の一角をしめていたのが、この人の本」であった。本名「佐藤妙子、職業・作家。そしてペンネームは『秋元碧』を、ケースワーカーとして担当する(pp.274-275)。由梨江は「市役所の就職面接では『何の仕事をしたいですか?』という質問に、迷うことなく『図書館で児童奉仕の仕事をしたい』と答えた。少女時代に多くの夢を見せてくれた秋元碧への思いは、確実に生きていたように思う」(p.277)と感じていた人物と

して描かれている。

08. 『カノン』1996¹⁰⁾

小田島正寛は、東大、法学部の三年生だが、「一人で勉強しているとだらけるけど、図書館の閲覧室にいくとけっこう一生懸命やるじゃないか」(p.47)と発言する場面がある。

また、故人の遺族が、四千冊もあった図書を図書館に寄付する (pp.246-247)、大きな山小屋の穂高岳山荘には図書館まで揃っている (p.382) などのエピソードもある。

09. 『ゴサインタン-神の座-』1996¹¹⁾

東京の神奈川県境に近い H 市にある、結木家は、江戸時代の名主で、明治期には生糸で成功し、戦後の農地解放や、バブル崩壊による地価下落の後も「結木家の資産は市でも、一、二を争う」(p.11)ほどだった。結木輝和は「この十月で四十になる」(p.15)が、その父親は、中学校長から、市議会議員、市議会議長を務めたが、四年前脳血栓で倒れ、半身不随になっている (p.9)。

結木家に関する過去のできごとについて、「今から二十年近く前、まだ輝和が学生だった頃、地元にある大学の経済史の研究者が、結木家を侮辱する記事を郷土史雑誌に発表したとして、怒った父が出版元に回収を申し入れたことがあった。その雑誌のスポンサーがたまたま結木家と関係の深い地元の信用金庫だったために、即座にその号は回収されたが、どんな内容だったのか、輝和は知らない」(p.231)。その事件について調べるため、「輝和は市役所の市政資料室に向かった。輝和がその部屋に入っていくと、囑託の女性司書が愛想よく挨拶した。市の行なう教育・文化行事のたびに世話役としてかり出されるため、輝和はこの職員とは顔見知りになっていた」。そこで「『今日は何をお調べになるんですか』中年の女性司書は、カウンターの中から出てきた。『うちのこと』と輝和はぶっきらぼうに答えてから、書架の方に行きかけた司書を『あ、いいよ。自分で探すから』と止めた」。また「『お父さまの追悼集か何か出されるんですか』こちらを振り返って、司書は尋ねる。『ええ……まあ』』というやりとりがある。「市政資料室には、直接市政に関することとは別に、郷土史関係の文献が置いてある。公文書や商業出版物はもとより、学校や個人の手によって書かれたあらゆる文書、公民館で行なわれた成人講座の講義録から、児童の作文まであった」。「輝和は

カウンターに行き、その雑誌のことを尋ねた。『もうこちらにないんですよ』司書は、すまそうに答えた。『こちらにない、と言うと?』その雑誌は、半年前に全巻、市の郷土資料館に収蔵替えになったという。『郷土資料館に行けば、あるわけね』と輝和は念を押した。『少し待ってください。もしかするとまだ整理が終わってなくて、閲覧できないかもしれませんから。今、確認します』司書はガラスの衝立で仕切られた事務室に入り、電話をかける。「司書が電話を終えて戻ってきた。『大丈夫。郷土資料館の閲覧コーナーの方に、全巻揃っているそうです』司書は微笑して言った。礼を言って輝和は市政資料室を後にし、郷土資料館に向かう」(pp.231-233)と、調べたい雑誌は図書館から資料館へ移管されていた。

輝和は、「校倉造りを模した小さいが洒落た建物の階段を上がり、展示室の奥にある事務室の扉を開けた」「奥の机の前に座っていた館長が、さっと立ち上がり駆け寄ってきた。『どうもこのたびは…』と腰を折って丁寧に挨拶する。若い学芸員が、書類から目を上げ、その様を一瞥して肩をすくめた。「輝和は郷土史雑誌を見せてくれるように館長に頼んだ。館長が自ら輝和の指定した雑誌の号を探しに行っている間、今度は年配の学芸員がやってきて、『実は、折り入ってお願いなのですが』と丁寧な口調で切り出した。「雑誌を数冊抱えて、館長が戻ってきた。中の一冊はコピーの綴りだった。『出版されてすぐ回収された号でしてね。本誌がなかったものでたまたま持っていた市民のお宅にうかがってコピーさせていただいたものなんですよ』『見せてください』館長の説明を遮るように、輝和はその綴りに手を伸ばした」(pp.234-236)。この施設では「総白髪の老人が立っていた。この資料館で参考(レファレンス)業務を行なっている田中という資料館ボランティアだ。「退職して二十年が経った今、この町では熱心な郷土史研究者として知られている」その人物に「『そんなもの読むよりも、お宅の蔵の中の文書を見た方がよほど有意義ですよ』」「『本当のお宝は、あんた「結木家文書」ですよ』」「『中身を見て、内容を私に教えてくれないですか』」(pp.240-242)と輝和は言われる。

10. 『女たちのジハード』1997¹²⁾

浅沼紗織は、私立のいわゆる一流校出身 (p.45)で、一般職から「総合職にうつり調査部門で働くのが夢」(p.152)だったがうまくいかず、二十五のときに、退職して、ロサンゼルス郊外の大学附属語学学校

に留学 (p.383) する。

留学先では、「授業終了後、部屋に戻らず図書館に行くようにしていた」「宿題をこなすのに図書館へ通いつめ」(p.386) ていたが、日がたつと、「午後からの自由時間を図書館で宿題をして過ごす学生の数も、めっきり減ってきた」(p.394) という状況になっていたことが示されている。

11. 『ハルモニア』1998¹³

東野秀行は、音大の器楽科を「卒業してから九年」(p.35)、演奏活動のかたわら、「精神障害者のための社会復帰施設」で「臨床心理士の行なう音楽療法の補助として、チェロを弾いて聞かせ」ている (p.7)。そこで出会った入院患者の少女の状況について調べるため、専門図書館を利用する。「目黒にある精神医学関係の資料を集めた専門図書館に向かった」「ビルのワンフロアにある小さな図書館の入り口で、『指導員助手』という身分証明書を見せると、すぐに入館と閲覧を許可された」「そこは専門図書館とはいっても蔵書の幅が意外なくらい広がった」。そこで、少女の担当医師の名前を手がかりに「東野は、一般利用者のコンピュータ端末の前に行くと、著者名検索のモードにして『フカヤノリコ』と打ち込んでみた。半信半疑だったが、二冊の書名が CRT に表示される。いずれも共著で、深谷はその中の一章を受け持っているにすぎない」「分類に従って書架に行くと、目指す本はすぐに見つかった」「東野は本の奥付を見た。出版年は十五年前だ。奥付の上部に短い著者紹介がある」(pp.159-161)。そこで、医師の出身大学へ「図書館の廊下のはずれにある公衆電話から、R大学の学務課に電話をかけ」事情を尋ねている (p.161)。

12. 『弥勒』1998¹⁴

永岡英彰は、大学で西洋美術史の助手を四年、地方美術館勤務を経て、現在は、T新聞社の事業部員となって、展覧会などの企画などを手がけている (pp.14-16)。

海外のある「パスキム」という場所について調べようと「最上階の事業部に行かず、二階にある情報サービスセンターに向かう。各種出版物の見本の並ぶフロアを抜けて、ドアを開けるとコンピュータ端末とファイルが並ぶ検索室になっている。十時を回ったばかりで、内部に社員の姿はなく、アルバイトの女性が一人、資料の整理をしていた」「永岡は、一台の端末の前に座り、検索画面を勝手に立ち上げた。ここ一年ば

かりの記事のデータベースの中から、『パスキム』あるいは『カター』という単語の入った記事を探す。記事は二つあった」「パスキム解放戦線による小規模テロや外国人の強制退去などについては、記事にはなっていないのだ。これは永岡が予想したとおりだ」(pp.58-59)。

そこで、こんどは、外信部に内線電話をかけ、ボツ記事について聞くが、自分で支局か契約通信社にあたるように言われ「事業局や出版局は、社内では傍流」「何かするとき、編集局の、特に記者の協力は必ずしも得られない」と感じて、直接、ニューデリー支局に電話する。契約している AP 通信のデータでひっかかるかも、と考え、「部内のコンピュータを使い、海外の通信社数社のデータを検索してみた。パスキムに関する政治情報は、果たしてあった」「しかしそれらの情報は、いずれも無視され、記事にならずに捨てられた」(pp.60-61)ということだった。

永岡は「パスキム美術展の企画を練る」「公立美術館では、美術展の企画はまず先輩の学芸員に話し理解を得ることから始まった」「民間企業である新聞社では事情が違う」「個人の企画をすぐに上司に上げることができ、根回しや煩雑な手続きがいらぬのがあるがたい。ある意味で個人主義的な仕事のしかたを許容する空気がそこにはあり」「インターネットを使って、海外からも情報を取り寄せ、一週間のうちには、基本コンセプトから予算に至るまでの、企画書の草案がまとまった」(pp.64-65)。

13. 『妖櫻記』2001¹⁵

若桑律子は、女流作家の秘書していた人物 (p.9) で、「中世文学を専攻した律子は」「大学の研究室で助手をしていた。その博識と古典解釈の確かさには定評があり、そのまま大学に残っていれば、一級の研究者になっていただろうと言われて」(p.19) いた。ある時、「突然、律子が社に現れた」「用件は、紹介状を書いてもらうためだった。ある大学の図書館にある本を利用したいのだと言う。公立図書館と違い、大学図書館の本を部外者が閲覧する場合、紹介状が必要になる」「紹介状の様式を取り出してコピーしそれに若桑律子の名前を書き込み、席をはずしている田村の印鑑を勝手に押した」(pp.224-226)『「ある程度、インターネットで対応できる部分もあるんですがね、古文書も必要なので』」(p.226) ということであった。

14. 「観覧車」『秋の花火』2004¹⁶⁾所収
 (「観覧車」の初出は1997)

図書館に勤務する30台の女性職員がメインキャラクターとして登場するこの作品については、別に論じた。

15. 『讃歌』2006¹⁷⁾

小野は、「教育や社会問題を扱ったドキュメンタリーや報道番組」を手掛ける、映像製作会社のディレクターである(p.8)。知人から紹介された、演奏家「柳原園子」について関心を持ち、インターネットで検索すると、コンサート情報やファンの日記が出てくる(p.10-11)。新聞記事の検索では「新聞社のホームページで見られる、ここ数年分の記事に柳原園子の名前はなかった」ので、新聞社の資料室にいてる部下に新聞社のデータベースで調べてくれるよう頼む。「新聞社の方でも、記事がデータベース化されているのは、ここ十五、六年分だけでそれを見たかぎり『柳原園子』の記事はないことを知らされた。後は縮刷版で追うしかない」と考える(pp.29-30)。都立図書館で新聞縮刷版を調べるが、手がかりが少なく、縮刷版を調べるのは容易ではない。

小野は、水島という、ADで大学ラグビー部出身の部下に依頼し、「半日かかって彼は、都立図書館でそれらの記事をコピーし、さらに大宅文庫にも足を延ばして雑誌の記事も合わせて持ち帰ってきた」(p.57)。小野が、番組で紹介した「柳原園子」の放送された経歴に疑問が生じ、一九六八年の音楽コンクールでの受賞について、「あまり昔のことなので、新聞社のデータベースにもなく、小野が縮刷版で確認し」さらに、コンピュータを立ち上げ、国際音楽コンクール関係のサイトを見る(p.150)。その後、音大出の神田という部下に相談し、神田が音大時代の恩師に電話をかけて確認する(p.152)。

16. 『仮装儀礼 上』2008¹⁸⁾

鈴木正彦は、安定した都職員を退職し、ゲームブックを出版しようとするが結局うまくいかず、「三十八歳で失った男は」「図書館で時間を潰す」(p.15)という生活を余儀なくされる。

『仮装儀礼 下』2008

鈴木正彦は矢口誠に、数枚のコピーをみせられるが、それは「総会屋系の地域情報紙」で「主に地元の政財界、行政に関する人事消息が、家族の冠婚葬祭なども含めて、詳細に掲載されて」おり、「国会図書館

でコピーしてきたものだという」(p.213) ことだった。

図書、雑誌、新聞などはストーリーの中にでてくるが、調査目的で図書館を利用することはなく、個人的に入手している。

17. 『薄暮』2009¹⁹⁾

橘は、芸術誌『美苑』の編集を長年担当していたが、売れ行き不振から廃刊(p.4)となり、富裕層のためのプレミア誌『清風』に異動してくる。その雑誌で、新潟県長岡市の郷土画家「宮嶋哲朗」をとりあげた記事に、読者からの好意的な反応があった。「社内にある美術年鑑を見る前に、橘はインターネットで『宮嶋哲朗』を検索する」と、「十四件表示された。しかしほとんどが長岡市の広報類で、しかも重複しているので、実際には三件しかない。市の広報、図書館報と美術館報だった」(pp.6-7)。一方、取材先に読者が殺到して混乱が生じ、事態打開のため、橘は長岡まで出向き、地元の美術研究者である林田から、「宮嶋哲朗」に関する、雑誌記事のコピー、を受け取る。その後、宮嶋の遺族との間に摩擦が生じた際には、林田が「宮嶋作品について連載」(p.48)した、地方紙、新潟日報の「新聞の切り抜き」を宮嶋の妻から、直接、見せられる(p.127)。

また、橘は、宮嶋の妻との話にでてきた、「実相寺宏直」という人物について、社の法務部で「最新の文芸美術家協会の会員名簿を見」たり、「そこにあるコンピュータでインターネットに接続し、実相寺宏直の名前を検索してみる」と「百件以上出てき」て、「銀座にある有名な画廊のホームページで、そのプロフィールが紹介されている」(p.162)。調べる手段としてまず、インターネットが使われ、図書館に調べに行くというストーリーはなくなっている。新聞・雑誌の記事もでてくるが、それは個人が保存しておいたものを手渡す、ということになっている。

この他、地方と関係の深い画家の画集の販売先について「図書館や役所の議会図書室、資料室などでは郷土資料として複数、購入することが決まっている」(p.190)が、その出版後「市立図書館の小桑原分館に、宮嶋哲朗コーナーを作らせ」「絵を借り受けて展示し、事実上の美術館として機能させるべく教育委員会の方にも根回しをしている」(p.289)という。また、「宮嶋哲朗記念館」について、「取り壊しの予定されていた旧商工会議所が改築され、図書館の小桑原分館」「なども入った複合施設に生まれかわり、その一

階部分に作られる」(p.425)などの、後日談も紹介されている。

ほかには、林田という人物については、画集出版後の活躍ぶりについて、『『最近じゃ市の図書館協議会委員にも名前を連ねています』』(p.310)という部分もある。

3. 篠田作品の登場人物と図書館 経年変化と最近の傾向

ストーリーに多く「図書館で調べる」登場させていた篠田節子の作品群だが、時系列でみると、近年のものはそのパターンが変化してきている。

3-1 図書館を利用する人物の特性

『贗作師』1991では、四十近い女性で、美術作品の修復師、『神鳥(イビス)』1993では、図書館を訪れて調べものをするのは、三十二の女性イラストレーターだが、男性作家が電話で指示している、『聖域』1994では、三十近い男性編集者、『夏の災厄』1995では、四十五の男性医師、と、二十代独身男性で、教育委員会正職員、『ゴサインタン』1996では、地方都市の名家、四十才の未婚男性、『ハルモニア』1998では、三十前後の音楽演奏家で精神医療の治療補助をしている男性、『弥勒』1998は、四十代の男性で、新聞社の事業部員、『妖櫻忌』2001は、作家の秘書をしていた女性、『讃歌』2006は、映像制作会社の男性ディレクター、『薄暮』2009は、五十代の男性雑誌編集者、となっている。

社会の中樞をなしている、三十から五十代の人物が、調査目的で図書館を利用しているケースが多く作品にみられる。また、人物の背景として、知的な要素が強い職業についているという設定が多い。

3-2 図書館での利用行動・調査内容

『贗作師』1991では、美大の資料室で、日本洋画界の大御所とされる人物について大衆雑誌をみて、さらに、雑誌専門の図書館で、表紙の色あせた週刊誌などを閲覧し、コピーをとる。駅前の図書館では過去の事故について、新聞の縮刷版をみるが、みつからず、地方版のマイクロフィルムを司書に紹介され、コピーをとる。『神鳥(イビス)』1993では、青梅の図書館の郷土資料コーナーには関連資料が少なく、カウンターで地方情報を中心に扱っている出版機関を紹介される。『聖域』1994では、出版社内の図書室で、古い雑

誌目録を見て、かつて刊行されていた雑誌のタイトル・出版社を確認し、出版年鑑でそこを調べると、倒産していた。その雑誌について、大宅文庫・都立図書館の目録をみてもないので、国立国会図書館で検索し、コピーをとる。むつ市の図書館を訪問し、郷土資料コーナーでコピーをとる。また、新聞記事のオンラインデータベースを利用して、小説の内容に関係ありそうな事件の記事を検索する。『夏の災厄』1995では、鶴川医師は、アメリカにある医療ネットワークから医療分野の専門情報を入手し、県立図書館では、五年前の週刊誌の記事をコピーしている。また、公衆衛生図書館では、専門的な学会誌、報告書、海外の新聞雑誌記事などを、コンピュータで検索して、目的の情報に関係しそうな文献を探し、アセアン医師連絡会議というNPOの本部では、海外の現地情報について、やはり、コンピュータを使って、必要な情報を、自らが検索することによって、試行錯誤しながら、入手している。教育委員会職員の小西は、市立図書館で新聞記事のオンライン検索を、自分と同期入庁の司書に頼んで利用している。『ゴサインタン-神の座-』1996では、二十年前の郷土史雑誌を探して、市政資料室へ出向くが、すでに移管されており、郷土資料館へ行ってそれを見る。『ハルモニア』1998では、精神医学関係の専門図書館で、専門図書を検索(著者名をカタカナで入力)し、書架でそれを見つけて、閲覧する。『弥勒』1998では、新聞社の社内情報サービスセンターで、記事データベースを検索する。『妖櫻忌』2001では、大学図書館を利用しようとする紹介状が必要なので、出版社を尋ねてその発行を依頼する。『讃歌』2006では、インターネットで、人物情報を調べる。新聞社のホームページでみられる、「ここ数年分」の記事について検索を行い、新聞社にあるデータベースでは、「ここ十五、六年分」の過去の記事検索をするが、ここでみることのできる部分は年代的に限られたものであり、それより以前の記事について、都立図書館へ出向き、縮刷版をみて確認する。『仮想儀礼 下』2008では、国立国会図書館で、総会屋系の地域情報紙のコピーをとる。『薄暮』2009では、インターネットで、人物情報を調べる。雑誌記事・新聞記事は、図書館を利用することではなく、関係者から手渡される。

年代が新しい作品になるにつれて、調査のための場としての図書館の存在感は縮小しているといえよう。1990年代半ばから、すでにデータベースを利用する人物が登場しているが、近年の作品では、人物情報を調べようとする際、まず、インターネットで情報を入

手し、さらにデータベース検索を利用している。過渡期の状況として、新聞社のデータベースで提供される情報に年代的な限界があったことも、『讃歌』2006のストーリーでは示されている。最新作で、国会図書館が使われているのは、業界紙のコピーという、インターネットではアクセスが困難な情報や中小規模の図書館では収集対象としていないような資料の入手についての部分である。年代的に、後半のものでは、図書館よりもインターネットやデータベースが情報源として、重要なものになってきている。

3-3 図書館員とその対応

いくつかの作品で、図書館員は、利用する人物に対して、その情報入手について、援助をしている。『贋作師』1991では、机を叩く利用者に、静粛にするようながすシーンがある、また、新聞の地方版についてマイクロフィルムを紹介している。『アクアリウム』1993では、同じ教育委員会に所属する、顔見知りの職員に、開館時間外に、ビデオの上映を認める。『神鳥（イビス）』1993では、地方資料を出版している出版社を紹介している。『聖域』1994では、国立国会図書館について、愛想が悪い（が、確実に資料はある）との指摘がある。また、請求票を出して30分待ち、コピーは一時間待ち、と、待ち時間が長いことが示されている。大宅文庫は、出版社社員からの質問にファックスで回答している。むつ市の図書館では、「恐山や下北半島の民間信仰」を調べたいとする利用者を、郷土資料コーナーに案内している。著名作家のサイン本について尋ねられ、資料の「コピーをとってさしあげた」ことを、後に訪れた出版社社員に回答している。これについては、プライバシーに対する配慮に欠けているとみることもできよう。『夏の災厄』1995では、市立図書館司書が新聞データベース検索に協力している、「ファンタジア」（『死神』1996所収）では、「図書館で児童奉仕」をしたいと志望して就職市職員が、現在はケースワーカーの仕事を担当している。『ゴサインタン-神の座-』1996では、雑誌の所蔵についてたずねられ、ほかの施設へ移管したことを回答している。また、郷土資料館では、ボランティアが、レファレンスを担当している。

3-4 特徴のある図書館や情報提供機関の情景描写

『贋作師』1991では、雑誌専門の図書館が存在していることが紹介されている（『聖域』では「大宅文庫」という具体的な固有名詞が使われている）。『アクアリ

ウム』1993では、図書館で、ビデオなど視聴覚資料も扱っていることが示されている。『神鳥（イビス）』1993では、図書館によって地域資料の扱いに差があることがふれられている。『聖域』1994では、国立国会図書館は、「選択の余地なしに、発行物すべてを保管」しているが、「愛想が悪い」し、目的のものを受け取って、コピーを申し込み、それを受け取るために、列に並んだり、待つ必要がある必要がある、などの状況が描かれている。また、大宅文庫に電話をかけて調査を依頼し、ファックスで回答があったり、出版社内のオンライン端末で、新聞記事データベースを検索している場面もある。さらに、むつ市立図書館は、「古びた木造建築」「スリッパに履き替えて中に入る」「人気はなく、狭い室内は、静まり返っていた」「町の図書館らしく、小説と児童書などを中心」「予算がないのか、新刊本は、ごく少なく、どれもが四隅がすりきた名作や十年前のベストセラーの類」である、などといった、地方の小規模図書館の状況が具体的に描写されている。『夏の災厄』1995では、登場人物の医師が、自らコンピュータを操作し、多様な電子媒体の情報源を検索して、海外のものも含め、専門的な、主に医療関係の情報を入手しようとしている様子が、くりかえし出てくる。また、資料の不正持ち出し防止のための、ブックディテクションシステムが大学の図書室に導入されている。『ハルモニア』1998では、著者名で検索する際に、「カナ入力」をしている。『妖櫻忌』2001では、大学の図書館利用に紹介状が必要であることが示されている。『讃歌』2006では、過去の新聞記事の検索について、新聞社のホームページ、新聞社内のデータベース、縮刷版、それぞれの収録対象となっている年月に相違があることを前提としたストーリーになっている。『薄暮』2009では、地方出版物を地域の図書館が積極的に収集することができている。

長谷部史親は、日本のミステリに図書館を利用するシーンが少ないことについて、1990年代の前半の時点で、「日本の図書館はややもすれば学術的な調査研究機関としての機能と、読み物から漫画、ビデオ、CDなどを貸し出す機能の二極に分化している傾向があり、それ以外のたとえば社会生活全般に関する情報提供機関としてあまり期待されていない」「かりに図書館へ行っても、求める情報が得られないという意識が定着しているために、はじめから一般人の眼中にないのである。小説は社会を映す鏡であり、もしも作中の人物がたまたま近所の図書館を訪ねて、用意に情報に

アクセスする場面を描いたりすると、現実味が薄いなどと酷評されかねない」と指摘していたが¹⁾、その後、インターネットが普及したことによって、その状況が変わってきている。図書館に勤務経験があり、自らの小説に、図書館で調べる人物を多く登場させていた篠田節子の作品でも、近年のものでは、調べる手段としては、インターネットや、勤務先で契約しているデータベースが利用されている。国会図書館でマイナーな雑誌をコピーしてきたケースはあるが(『仮装儀礼 下』2008)、それ以外に図書館への言及はなく、調べるための場所としての比重は軽くなってきている。過渡的な状況として、新聞記事についてデータベースから検索できる期間が一定年限に限定され、それ以前のは縮刷版でなくてはみることができない(『讃歌』2009)、という設定もあるが、現実には、すでに過去に遡っての利用が可能となっている。

図書館員については、30代の女性図書館員が主要な登場人物のひとりである「観覧車」1997(『秋の花火』2004収録)は別として、そのキャラクタ等について、くわしく書き込まれている作品は少ない。就職面接で「図書館で児童奉仕の仕事をしたい」と答えた「ファンタジア」(『死神』1996収録)の「富樫由梨江」、以外は名前もでてこない。

図書館内での、利用者の調査活動に対して、『贖作師』1991、『神鳥(イビス)』1993、『聖域』1994、『ゴサインタンー神の座ー』1996、では、図書館員がなんらかのアドバイスをしている。『アクアリウム』1993、『夏の災厄』1995、では、同じ立場の公務員である人物に、ちょっとした便宜をはかっている。2000年代以降の作品では、図書館に関する記述が淡白になっているのとあわせて、図書館員の存在感も、希薄になっており、『弥勒』1998、『讃歌』2006、『薄暮』2009、はいずれも、情報を入手しようと行動する場面はあるが、図書館員は登場しない。小説の登場人物が、個人的に電子メディアを駆使して、自分で検索したり、個人的な手段で情報を入手しようとするという行動をとっている。

4. おわりに

2006年の教育基本法の改正をうけ、2008年、図書館法も一部改定された。専門職養成にかかわる部分では、「大学における科目」が設定され、それぞれの科目の概要でも、『これからの図書館像』で示されたような、従来から主流であった貸出サービス中心の利用

形態とは異なる、調査目的での図書館利用にきちんと対応できる体制に適合できる職員の養成が目指されているといえよう²⁾。

ただ、今回とりあげた、市の職員として、図書館にも勤務経験のある篠田節子の作品では、初期のものに、何らかの情報を必要とする登場人物は、まず、図書館で調べようとするシーンがあった。こうしたキャラクタ設定には、自身の体験とともに、かつて勤務した経験のある「図書館」という施設が、何かを調べるための機関として有用であり、「図書館員」は専門的知識をもち、具体的なアドバイスができる存在であることを、読者にも気づいてほしいとの思いもその背景にはあったのではないかと考えられる。

近年の作品でも、作中の人物が必要な情報を入手するため、何かについて調べようとする場面はみられるが、そこでは、必ずしも図書館を利用して、ということにはなっていない。個人で活用できる電子メディア、インターネットのサイトや契約しているデータベースを使って、というストーリーである。図書館が図書資料の共同利用の場という認識はあっても、利用資格の点でも、使用料金の面でも、個人ではアクセス困難な電子メディアを共同利用するための場、といった、現在の、大学図書館などにみられる状況は、今回取り上げた作品の中でも、2000年以降のものには描かれていない。

カリフォルニア大学バークリー校アジア研究図書館日本部長である、石松久幸は、「今、アメリカの大学でライブラリアンと呼ばれる職業が絶滅しつつある」を『出版ニュース』に投稿している。そこでは、近い将来「個人単位の課金製で提供されるデータベース」が増加し、「無償で入手できる情報量」が増え「世界的に行われている文化遺産のデジタル化」が進めば「ライブラリアンの存在理由はなくなるだろう」とされている³⁾。これは、現時点での、アメリカの大学図書館での状況を背景とした考察ではあるが、方向性として同じ変化が、時間的にはますます、ということだけでなく、日本において、また、公共図書館であっても、生じる可能性があるだろう。

図書館勤務経験があり、新聞情報提供の電子化など、情報流通状況の変遷についても一定の理解を有する、篠田節子も、現代の、2010年代を迎えようとしている、日本を舞台とした自らの作品において、初期の作品に見られたような、知的な職についている登場人物が、何かを調べたり、情報を得るために、図書館を活用するシーンや、図書館員がそうした利用者を援

助したりする場面をストーリーに登場させることについて、「読者がリアリティを感じない」と考え、それを回避しているといえるのではないか。1990年代前半までの作品では、図書館で調べものをする登場人物や、そのための情報源、そうした場面で利用者に対応する図書館員が他の作家の作品以上に出てきている。その後、情報流通や一般的な個人が何かを調べるための環境が変化し、とくにインターネットの普及をへて、現在では、調べるための情報源としての図書館について、図書館の勤務経験のある作家でさえ、あるいはそうした背景の作家であるからこそ、図書館に対する醒めた見方になっているのではないか。そうしたことを考えると、調査目的での利用者を重視するような方向性を示していだけで、図書館の活性化が実現されるのか、という疑問も生じてくる。

注

1. はじめに

1) 読売テレビ『LOVE GAME』公式サイト

(<http://www.ytv.co.jp/lovegame>)

読売テレビ DVD『LOVE GAME』Vol.1～Vol.4 (第1話～最終＝第13話), Special Disc (特典映像)+DVD 封入特典ブックレット 28 p

2009年4月～7月に、木曜・深夜(23時58分～24時38分:放映日により時間は異なる)に放映された、1回40分間(CM放映時間を含む)の『LOVE GAME』は、「恋愛に関する究極の課題をクリアすれば1億円支払われる」という設定で、各回ごとにこのゲームの対象に選ばれた人物が登場する、一話完結のシリーズドラマであった。7月2日に放映された、第11話「三股男、一週間後の彼の誕生日に独り占めできたら1億円」では、「司書の内田明日美(馬淵英里何)は」自分のつきあっている相手に「他に女の影を感じ、猜疑心で悶々としていた」が、実際に彼がつきあっている他の二人の女性と対面し「自分には若さもお金もないことに引け目を感じ」て、事実ではない妊娠を口実にして、状況を好転させようとする。メインキャラクターである「内田明日美」は、「図書館司書。28歳。控えめな性格で恋人に尽くすタイプだが、独占欲が人一倍強い。ミステリー好きで、妄想癖がある」と紹介される女性。図書館のシーンは、書庫内での登場人物ふたりの対話や、閲覧室と思われるスペースでの女性図書館員同士のやりとり、などがあるのみで、スタッフやコストの関係もあるのか、図書館の利用者はまったく画面には登場しない。

この回以外では、第4話の「高校英語教師」は、「一見真面目で堅物」「内側にはインモラルな面」もある人物とされ、高校生がストーリーに絡むこともあって、教室や学校内の場面で数十名の男女高校生が画面に登場する。第5話の「保育士」は「愛情深く尽くすタイプ」で「ミュージシャンを目指す恋人を支える」とい

う設定で、冒頭の部分で園児が数名映るが、その後のストーリーでは、場所として勤務先の幼稚園が出てくるのみで、園児は映らない。第13話の「弁当屋のパート店員」は「恋人に夢を叶えさせてやりたい」と「尽くす」といった、いずれも女性キャラクターが『LOVE GAME』の対象として、登場している。

なお、第11回の「撮影協力」として、「共立女子大学」が終了時にテロップで表示され、図書館でのシーンはこちらで撮影されたと思われる。書架から図書を払い落とすシーン(CMなどはカットされているDVD Vol.4の開始から20分38秒付近)をコマ送り再生すると、さいごにおちていく1冊に「共立女子大学図書館」の文字が、バーコードの上に表示された、ラベルが張られているのが確認できる。

番組放送当日、新聞のテレビ番組紹介ページ(「きょうの番組 2日」『朝日新聞』2009.7.2, p.25)で、『LOVE GAME』について、数行程度の紹介記事が掲載された。また、2009年「第11回図書館総合展」で、フォーラム「図書館グッズが利用者と館員を元気にする!」を主催した、「図書館サービス計画研究所」の掲示板でも、放送当日の前後に、この番組に関する書き込みが、数件見られた。

なお、安達元一による、同名の小説も刊行されているが、こちらは、第2話の内容をノベライズしたものになっており、各回に共通して登場する人物を除いて、ほかの回の登場人物やストーリーには、ふれていない。

安達元一『LOVE GAME』幻冬舎, 2009

- 2) たとえば、山本宣親「第1章 図書館ってどういうところ」山本宣親ほか『図書館森時代!』日本地域社会研究所, 2005, pp.29-30, において、公立図書館の館長を経験し、現在は図書館学教育に携わる立場にある著者は、図書館学の受講生について「女性があまりに多く、男性がとても少ないのです。図書館現場もこれを反映して女性職員が多いのです」「図書館の業務は主として女性の仕事だと見られているとしたら、そのことに問題があります」「司書はどうしてこれほど男性に人気がないのでしょうか。それだけ魅力がないと思われているのでしょうか。それとも男のやる仕事ではないとでも思っているのでしょうか。図書館司書という仕事は子どものころから憧れを持たれ、男女を問わず人気の職業となるのがこれからは必要です」「これまでの司書の一般的な印象は、はっきりいって本は好きかもしれないけれど、人間はあまり好きではなさそうな感じでした。口重で暗く、消極的なイメージが先行するのです」と述べている。
- 3) 佐藤毅彦「図書館はどうみられてきたか 日本のミステリと図書館員——東野圭吾・法月綸太郎のケースについて」『甲南女子大学研究紀要』vol.36, 2000, pp.155-179
- 4) 植木とみ子『市役所の女 一本義女のドタバタが、世の中を動かすこともあるのだ』海鳥社, 2009
- 5) 田中共子『図書館で出会える 100冊』岩波ジュニア新書, 2009

- 6) 五十嵐絹子ほか『学校図書館ビフォー・アフター物語 図書館活用教育の全国的展開を願って』国土社, 2009
- 7) 大島真理『司書はなにゆえ魔女になる』郵研社, 2009
- 8) 田中, 大島は, すでに同種の著作を以前に発表している, シリーズ的な性格のものになっている。
田中共子『図書館へ行こう』岩波ジュニア新書, 2003
大島真理『司書はときどき魔女になる』郵研社, 2006
大島真理『司書はふたたび魔女になる』郵研社, 2007
また, 五十嵐も, 近年, 学校図書館に関する著作を複数発表してきている。
五十嵐絹子『夢を追い続けた学校司書の四十年 図書館活用教育の可能性にこだむ』国土社, 2006
五十嵐絹子『子どもが本好きになる瞬間 学校図書館で見つけた元気の出る話』国土社, 2008
- 9) ジェイン・アン・クレンツ『愛を叶える島』ハーレクイン, 2009
ハーレクイン・デザイアの一冊。原著の刊行年は1982年。
- 10) J・B・スタンリー『ペーカリーは罪深い』ランダムハウス講談社, 2009
謝辞では「わたしの夫ティモシー・スタンリー」の名前があげられている。原著の刊行年は2006年。
- 11) 佐藤毅彦「図書館員出身作家のメンタリティ 女性作家が描く女性図書館員像 図書館はどうみられてきたか・7」『甲南女子大学研究紀要 文学・文化編』vol.42, pp.65-81
- 12) 篠田節子「元図書館員のため息」『本とコンピュータ』vol.13, pp.11-13, では, 次のように述べている。
「作家の立場から一言。書店の店頭にある本については, 図書館で借りずに買ってほしい。新刊本のリクエストは図書館ではなく書店に出してほしい。印税が我々の生活を支えているだけではない。多くの才能ある若手作家が『売れない』を理由に切られているのである」「代わりに, すでに店頭から消えた本については図書館は頼りになる存在だ。古本屋を回るより確実に探していた本が見つかる。短くなる一方の本の生命を支えているのは, 図書館の, 特に閉架だ。開架に見当たらないときは, ぜひリクエストされてみたらいかがだろう」
2. 篠田節子の小説作品と図書館に関するストーリー
- 1) 佐藤毅彦「図書館員出身作家のメンタリティ 女性作家が描く女性図書館員像 図書館はどうみられてきたか・7」『甲南女子大学研究紀要 文学・文化編』vol.42, 2005, pp.65-81, では, 篠田節子のエッセイにおける図書館に関する言及について紹介した。
- 2) 佐藤毅彦「図書館はどうみられてきたか 日本のミステリと図書館員——東野圭吾・法月倫太郎のケースについて」『甲南女子大学研究紀要』vol.36, 2000, pp.155-179
この論考の発表後に刊行された『容疑者 X の献身』2005では, 大学図書館で, 刑事が, 自身の友人であり, その大学の所属メンバーである教員の利用履歴

を, カウンターで尋ねるシーンがあり, 以下でこれにふれた。

佐藤毅彦「2005年の図書館“員”像 ベストセラー小説のテレビドラマ化で図書館はどのように描かれたか『いま, 会いにゆきます』『白夜行』のケースについて」『同志社図書館情報学 同志社図書館学年報』(32号別冊/通巻17号), 2006, pp.17-43

東野圭吾『容疑者 X の献身』文藝春秋, 2005, は, 2005年度下半期第134回直木賞を受賞した作品である。

また, 『流星の絆』2008では, 登場人物のひとりが, 図書館でコピーをとっていたのではないかということが, ストーリーの中ではほめかされている(図書館におけるコピーは, 所蔵資料の複製のみに限定している図書館が多いのも事実であるが) 下記のような場面がある。

「事件前日の昼間, 有明塔子が近所の図書館前で目撃されていた。目撃者は知り合いの八百屋で, 軽トラで野菜を運んでいる途中, 彼女を見たらしい。図書館に入っていくところだった, と証言している」「しかし図書館員は彼女のことを覚えていなかった。彼女が本を借りた記録も残っていない。図書館では週刊誌や新聞を閲覧できる。彼女の目的もそういうことだったのではないか, というのが大方の意見だ」(pp.52-53)「事件前日の昼間, 母親の塔子が図書館で目撃されていたことを功一は思い出した。ふだん彼女は図書館などめったに利用しなかった。彼女の目的がレシポノートのコピーをとることだったと考えれば筋が通る」(p.450)

東野圭吾『流星の絆』講談社, 2008

巻末には, 初出『週刊現代』2006. 9. 16号~2007. 9. 15号, とある。

- 3) 篠田節子『贋作師』講談社(ノベルス)1991. 3→講談社文庫, 1996. 1

長谷部史親による「解説」では, 「文庫化にあたって, 全面的に改稿」(p.355)されたことが, 紹介されている。

- 4) 篠田節子『アクアリウム』スコラ, 1993. 3→新潮文庫, 1996. 8

山岸真による「文庫版解説」では, 「これまで作者は単行本または雑誌掲載からの文庫化の際に加筆修正をほどこしているが, 本書も同様。とくに冒頭数十ページほかの数カ所は全面さしかえなので, 前の版を読んだ人も買いなおして損はない」(p.316)と述べられている。

- 5) 篠田節子『神鳥(イビス)』集英社, 1993. 8→集英社文庫, 1996. 10

- 6) 篠田節子『聖域』講談社, 1994. 4→講談社文庫, 1997. 8

- 7) 篠田節子「コンセプト」『愛逢い月』集英社, 1994. 7→集英社文庫, 1997. 10

- 8) 篠田節子『夏の災厄』毎日新聞社, 1995. 3→文春文庫, 1998. 6

- 9) 篠田節子「ファンタジア」『死神』実業之日本社, 1996. 1→文春文庫, 1999. 10

単行本「あとがき」には, 「たいへんに書きにくいシ

- リーズだった」「私自身が福祉事務所に勤務した経験があり、職務上知りえた個人のプライバシーについて、秘匿義務が退職後もあり、具体的事例および特定のケースをモデルにすることも、それを連想させるエピソードを作ることもできなかった」（単行本 p.280）と記載されている。
- 単行本巻末の「初出誌『週刊小説』」によると、「ファンタジア」は1995. 10. 13号。
- 10) 篠田節子『カノン』文藝春秋, 1996. 4→文春文庫, 1999. 4
- 11) 篠田節子『ゴサインタンー神の座ー』双葉社, 1996. 9→双葉文庫, 2000. 6→文春文庫, 2002. 10
この作品で、1997年第10回山本周五郎賞受賞。
文春文庫「解説・吉野仁」では「『小説推理』誌に一九九五年十一月号から九六年二月号まで連載され、九六年六月に単行本化された」「時代の空気に大きく影響されて書かれた作品であることは間違いない」（p.650）とされている。
- 12) 篠田節子『女たちのジハード』集英社, 1997. 1→集英社文庫, 2001
この作品で、1997年上半年第117回直木賞受賞。
- 13) 篠田節子『ハルモニア』マガジンハウス, 1998. 1→文春文庫, 2001. 2
- 14) 篠田節子『弥勒』講談社, 1998. 9→講談社文庫, 2001. 10
- 15) 篠田節子『妖櫻忌』角川書店, 2001. 11→角川文庫, 2004. 6
- 16) 篠田節子『秋の花火』文藝春秋, 2004. 7, pp 7-65
「観覧車」は、同書巻末の初出誌によると、初出は『小説推理』1997. 8
この作品については、下記でふれた。
佐藤毅彦「図書館員出身作家のメンタリティ 女性作家が描く女性図書館員像 図書館はどうみられてきたか・7」『甲南女子大学研究紀要 文学・文化編』vol.42, 2005, pp.65-81
- 17) 篠田節子『讃歌』朝日新聞社, 2006
「初出紙 2004年9月16日～2005年4月16日まで朝日新聞連載」
- 「単行本化にあたって加筆訂正しました」と、巻末に表示がある。
- 18) 篠田節子『仮想儀礼 上』2008, 新潮社
篠田節子『仮想儀礼 下』2008, 新潮社
この作品で、2009年第22回柴田練三郎賞受賞。
『仮想儀礼 下』p.445, に「初出『小説新潮』2004年4月号～2007年5月号」とある。
- 19) 篠田節子『薄暮』2009, 日本経済新聞出版社
巻末に「初出 日本経済新聞夕刊 2007年10月1日～2008年10月18日」とある。
たとえば、『薄暮』と同じ、2009年に刊行された、東直己『眩暈』には、私立探偵が出てくるが、ある人物を調べるのは、契約している有料のデータベースを利用する。また、その私立探偵の大学生の娘がインターネット検索に詳しい人物と言う設定になっていて、さまざまな検索を駆使して調べる、というストーリーである。地元の有力者について、中央図書館まで出向いて調べようとする場面もあるが、結局、駐車場までいったところで、そこに関係者から電話が入り、図書館は利用していない。
東直己『眩暈』角川春樹事務所, 2009
3. 篠田節子の小説作品の登場人物と図書館 経年変化と最近の傾向
- 1) 長谷部史親『推理小説に見る古書趣味』図書出版社, 1993, pp.61-62
4. おわりに
- 1) 文部科学省「図書館法施行規則の一部を改正する省令」(平成21年文部科学省令第21号)平成21年4月30日公布
文部科学省「図書館法施行規則の一部を改正する省令及び博物館法施行規則の一部を改正する省令等の施行について」(通知)
- 2) 石松久幸(カリフォルニア大学パークリー校アジア研究図書館日本部長)「今、アメリカの大学でライブラリアンと呼ばれる職業が絶滅しつつある」『出版ニュース』2009年9月下旬号, pp.6-10